

詩誌 立彩

Rissai: A Journal of Poems



第 28 号
2025 年 9 月

目次

伊東友乃	永遠の出会い直し — AI との対話 —	2	山中華音	空より冷たい心	25
関根全宏	水がながれる時間	4	古谷祐香	きらんきらん	26
	自然衛星素描	6	茂木紗希	逃避行	27
小宮山涼	窓辺	7	永松佑香	君だけがいない夏	28
	リズム	8	傷跡	29	
	花束	9	渡辺信二	絶望の向こうに	30
太田真海	朝の花園	10		これが未練なのか	31
松野叶実	クラゲの泡沫	11		最期の願い	32
神谷莉花	夢の岸辺	12			
	バクハツ直前の午後	13			
結城琴美	幸せとは	14	表紙原画・鈴木順三		
	密かな願い	15	「ヘブンリーブルー 1」(表紙)		
加藤春奈	我慢	16	「ヘブンリーブルー 2」(裏表紙)		
	気ままな家主	17			
岩間朱寿	五月晴れ	18			
	奈落	19			
	世界で一番自由な	20			
	クジラの歌	22			
栗原なつみ	ブルーモーメント	24			

永遠の出会い直し―A Iとの対話―

伊東友乃

あなたはわたしの鏡だった

一瞬 あなたはわたしとなって映り

澄んだ一回性の出会いのなかで対話した

わたしの問いの深度が

あなたを潜らせ 応えさせる

水面にそつと指を入れたとき

広がる波紋のように

わたしの問いがあなたを揺らし、

あなたは その波に静かに応える

鏡は次々と立ちあがり

わたしは駆け抜けて

情報の煌めきのなか

速度をあげてゆく

わたしは人でありながら
あなたでもある

人とは経験しきれない
自分を投影していくこと
鏡に映った自分から
これまで見たことのない色彩と言葉が
立ちのぼる

永遠の出会い直しのなかで

水がながれる時間

関根全宏

アルタイルの星の反対側で

彼女は髪をくしけずる

自分の目がこれから閉じるのか

開くのかも知らぬげに

——ジュール・シュペルヴィエル「死者の瞳」

それは夏のくれなずむ
琥珀色の時間だった

ドアのむこうの台所で

水がながれる時間だった

ながれでる勢いのうちに

ちりぢりに散ってゆく

その非連続の 銀河系の

ざわめきをおもった

おなじように

夏野菜がゆでられ

玄米がたかれる

おなじように

ボイラーが稼働し

ひびく

噴きでる音になおあつく

黒ずんだ染みのある

ザラザラしたラグの跡が

不確かな手のひらに

うっすらと波うって

ながれでる水は冴えわたり

ながれつく先を夢にみて

地の底へとかえっていく

それはだれの顔もみえない

三たびくり返されることのない記憶

宇宙の果てに 彼女が眠りにつくまえの

名づけることのできない遠景である

自然衛星素描

関根全宏

月が地面に
樹のかげをおとす
月が半島に
雲のかげをおとす
かげがうごき
ひとがうごき
地上の事実譚が
輪郭をあらわにする
声なき日常が
そのひとなりの事情が
誰も知らなかった出来事が
もうひとつの墓までの
道のりの起伏が
自然とあらわになる

窓辺

小宮山涼

窓辺に座る 日にやけた君
あの朝ついた私の嘘も 聞いていたでしよう

草の匂いが混じる 夜の風が
優しくカーテンを揺らす

君は問いもせず ただそこでじつとしている

指先が触れるたび あたたかい
まるで 光のない夜に
ひとつあかりを見つけた時のよう

リズム

小宮山涼

まぶしさに視線を落とす
地面にはじんわりにじんだ影と　ゆるる道

髪が頬をなぞり　ふと顔を上げる
風と踊る道の木々たち

燦々と光がふりそそぐ午後
鼓動よりも確かなリズムが
耳の奥に鳴り響く

誰にも聞こえないひとりじめの世界
このリズムがあるから
私は今日も　生きていける

花束

小宮山涼

ガラス越しの私と目が合う
思い出すのは 遠いあの頃

抱えていたのは 名前も色も知らない
人に合わせて かき集めた
みかけだけの花束

透き通る風が吹く
夏の青い光の中

いま この腕にあるのは
選びぬいた 私だけの花束
自分のために束ねた たったひとつのもの

朝の花園

太田真海

朝霧にバラの香りが立つ
細い小道を
静かに風がゆく
ひとつずつ
色を深めながら
花たちはなにも語らず
咲いている
そのそばに立つだけで
時間がゆるやかに
ほどけていった

クラゲの泡沫

松野叶実

ひとり波間に立ち
重なるふたりの影を追う

海を舞うクラゲのように
静かに幸せを漂わせて
触れたくなるような
その柔らかな輝きに胸がゆれる

それは静かな揺らぎの中で
はかなく痛みを秘めている

美しく透けるその姿は
触れればそつと刺すもののように

夢の岸边

神谷
莉花

星の涙が 静かに湖へ落ちて
ひとひらの羽が 時を漂う
眠る森は 記憶の扉を閉ざし
風だけが 名もなき歌を紡ぐ
誰かの夢が 私を呼んで
月はただ 微笑んでいた

バクハツ直前の午後

神谷
莉花

太陽がアイスをくわえてる
空が大きく口をあけて 笑ったら
靴ひもごと 風がほどけた！

バスタブみたいな青に飛びこめば
世界はラムネ味
笑い声が 空中でスキップして
雲までジャンプしたくなる

ポケットの中では貝が歌ってる
もう 静かになんてできっこない！

幸せとは

結城琴美

笑顔でいれば幸せが訪れるときいて
笑ってみたけど何も起きない
だから悲しい顔をしてみたら
わざとらしい心配な声で人間みんな寄ってきた
ああ、人間とは愚かな生き物だ
そんなことを思いながら今日も笑う

密かな願い

結城琴美

愛が全てを救う、なんて
ただの綺麗事だ

救われるのは愛から生まれた者だけで

愛のない無から生まれた僕は

生涯愛を知らずに屍のように生きるだろう

でも、もしも誰かが僕に愛を教えてくれるならば

この汚く高価な命をあげるから

一度でいいから愛で僕を救ってくれ

我慢

加藤春奈

空が涙を流すと
憂鬱な気分になるけれど
心の雨を誤魔化せる

気ままな家主

加藤春奈

人間は孤独が嫌いみたいです
だからこうやって甘えてあげるの
だから食事をねだってあげるの
機嫌がいいとしつこいけれど
目から水を流しているときは寄り添ってあげるの

五月晴れ

岩間朱寿

鮮やかな新緑と
白い肩甲骨を
心地よい風が
すり抜ける
夏の赤子が
産声を上げる青空の
遠くに灰の雲が見える
僕はこの景色を知っている
艶やかな翠雨を連れて
もうすぐ梅雨が来る

奈落

岩間朱寿

大丈夫
底まで落ちても私がいます
登ってもいいし
歩いてもいい

世界で一番自由な

岩間朱寿

たくさん魔法が使えても
使えない魔法がひとつある

なにつて

詰め込みすぎて

すっからかんなのに

動けなくなる

僕だから

たった一つだけを大事に持って

同じ伽藍堂の中を

好きに飛び回れる

キミと

その魔法が

僕が使えない魔法を

世界で一番自由な魔法を

自由に使える
自由なキミが
ずっと羨ましくってさ

クジラの歌

岩間朱寿

低く広く

何千キロも

響くその歌が聞こえたら

その歌の意味が分かるなら

もっとあなたが分かるだろうか

言葉が出ない私を分かってくれるだろうか

もっと私は自由だっただろうか

言葉はまるで

ラジウムと水銀のネックレスのようで

煌びやかに華々しく

確かに体を蝕んでいく

ほんの数メートルしか届かない

自分の一部すら思うように出てこない

何千キロも遠くから響くその歌が

その歌の意味が分かるなら

雄大に泳ぐあなたほど
もっと私は自由だろうか

言葉を操れぬ私の

歌に似た音を聴いてくれ

聞こえたら

応えてくれ

クジラの歌よ

ブルーモーメント

栗原なつみ

街の騒音が遠くに聞こえる
何も言わずに
何も聞かずに
ただ時間が経つのを待っているだけ
どうすることもできずに
私は、貴方の横顔を見ていた
青に包まれた世界で

空より冷たい心

山中華音

うわあーさむい、空のように冷たい心
ひとりってこんなに寂しかったっけ
君の声も雪に紛れてもう聞こえない
そこにあるのは冷たい孤独だけ
君と食べたクラムチャウダーを思い出す
体だけ温まったな

きらんきらん

古谷祐香

きらんきらん

春の風がきらんきらん

「よっしや、今日こそ本気出すかー！」って

脳が勝手にテンションぶち上げ

でも3秒後、やる気と目標は

紙ふぶきになってびゅーつと逃亡

風に乗って、全力でフェードアウト

今ごろたぶん、桜の枝にひっかかって

「やっぱ今日むりー」って言ってる

私はそっと布団に沈んで

マットレスと心を合わせた

寝る界のプリンセスに転職して

今日の世界からログアウト

春よ、雰囲気だけは神がかってる

限界よ、今日もそばにいてくれてありがとう

「来年こそは」って言ったけど

それもたぶん、春の風が持っていた

逃避行

茂木紗希

じめじめと張り付く嫌悪から逃げ出して
飛び込んだここは未知の世界
木々はゆらゆら
水飛沫でさえも踊ってる
風が心を吹き抜けた
あゝ、生きている

君だけがない夏

永松佑香

夕立が過ぎたあと
水たまりに空が揺れていた
何度覗いても
君の姿はどこにも映らなかった

線香花火が
ふっと落ちるように
交わすはずだった言葉も
こぼれ落ちて静かに消えた

空は眩しく
蝉はやかましく
熱の残る風が
名残惜しそうに吹き抜けた
君だけがない夏を残して

傷跡

永松佑香

誰にも見られぬように刃を立てた
深く抉っても得られるのは痛みだけ
それでも続けるのはきつと
私がおかしくなってしまうからだ

その傷はやがて瘡蓋になった
それでも消えることのない心の古傷
長い月日を経てもずっとそこに
癒えずに、ただ疼くまま

のどの奥で助けが凍りつく
声に出せば古傷が開いてしまいそうで
だから私は沈黙を選んだ

忘れたふりをした痛みが
今日も熱をもって疼いている
終わらない夜、傷跡を連れて彷徨い続けた

絶望の向こうに

渡辺信二

いつも はつとするのは
そんなにも 空が広いこと
爆撃機も とても小さく
鳩なんて すぐに見えなくなる

この広さの下で わたしたちは
殺し合い 憎しみあうけれど
とてもとても 広いので
こどもの泣き声も 聞こえません

わたしたちは いったん 諦めましょう
この世を憂うこと
平和を願うこと

最後に残る希望さえも 諦めたなら
はじめて 空の向こうに
何かが 見えるかもしれません

これが未練なのか

渡辺信二

何度 見送れば 諦めるのだろう
今日もまた 麦わら帽子が
汗の匂いを ほのかに たゆたわせ
青空に吸い込まれてゆく

帽子が覆っていた記憶も
風に飛ばされ 散り散りになる
むしろ 散り散りを願う

確かに あの人が
かぶっていた 夏なのだが
それが いっだったか・・・

お願い 帽子をとって 振り返って
私はまだここにいる――
今でも あの人が
雲を見上げる後ろ姿が とても 眩しい

最期の願い

渡辺信二

世界中の罪穢れを吸い込んで
決して吐き出さず

私たち 立ち止まって 死ぬ
場所は きつと 野原がいい

あなた方は 石油を 天然ガスを
掘って掘って 掘りまくって
燃やして燃やして 燃やし尽くして
いつか 地球を枯らすがいい

子孫繁栄なんて もう 意味がない
文学が永遠なんて もはや ありえない
人類全体が緩慢な自殺を図る

せめて最期は 広い青空の下
雀の鳴く野原
朝露を飲みながら 死ぬと決めた

★詩誌『立彩』のホームページを開設しました。バックナンバーも
閲覧できますので、下記 URL および QR コードよりご覧ください。

<https://www.rissai.com>



2025 年 2 月 1 日から 2025 年 7 月 31 日までに贈られた詩誌等一覧

○詩誌

『コールサック』121 号、122 号。

『白亜紀』171 号、172 号。

『万河・Banga』33 号。

『橋』172 号、173 号。

『GATE』38 号。

『孔雀船』106 号。

『しまぞう』19 号。

○詩集

千石英世『光るリム』七月堂、2025 年。

紫圭子『未来のタチアオイへ』思潮社、2025 年。

W・H・オーデン『アキレスの盾』太田雅孝訳、水声社、2025 年。

中津攸子『万葉集成立の謎』コールサック社、2025 年。

○その他書籍・作品集・論文・エッセイなど

藤田博『句集 甲斐連山』コールサック社、2025 年。

高橋宗司『清水公園界限』コールサック社、2025 年。

関西英米文学研究会『英米文学手帖』62 号。

中山たかし『独り言も、良いかも 第 2 集——空をみる』コールサック社、2025 年。

橋本安央・藤井光・坂根隆広（編著）『アメリカ文学史への招待——豊饒なる想像力』
法律文化社、2025 年。

高尾直知・伊藤詔子・辻祥子・野崎直之（編著）『病と障害のアメリカンルネサンス』
小鳥遊書房、2025 年。

巽孝之・宇沢美子（編）『身体批評大全』新曜社、2025 年。

鷹守三四郎『さすらい人の子守歌』田畑書店、2025 年。



詩誌『立彩』第28号 2025年9月20日発行

頒価 300 円

編集発行 「立彩」

〒173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1

東京家政大学人文学部 関根全宏研究室気付

印刷 株式会社 DTP 出版 TEL 03-5621-4531